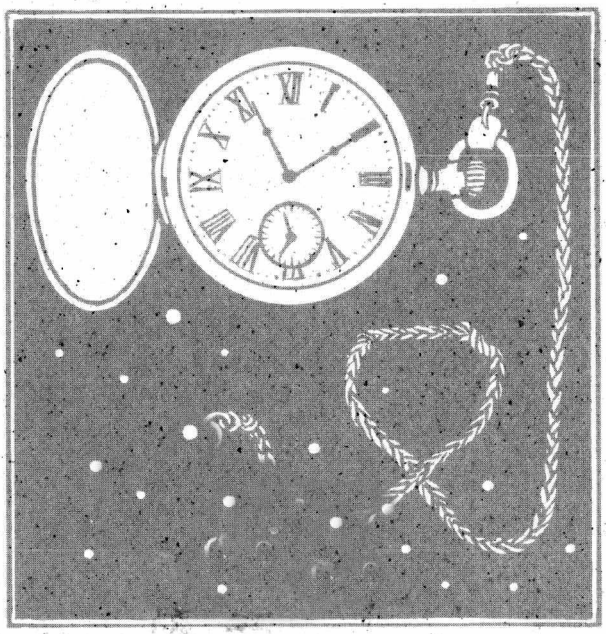
東野圭吾

むかし僕が死んだ家

が死んだ家



東野圭吾

双葉社

■著者紹介

東野圭吾◉ひがしのけいご

1958年大阪市生まれ。大阪府立大学電気工学科卒。1985年「放課後」で第31回江戸川乱歩賞を受賞、作家生活に入る。他に「浪花少年探偵団」「変身」「同級生」「分身」などの作品がある。

むかし僕が死んだ家

著　者——東野圭吾

発行者——井上功夫

発行所——株式会社双葉社
東京都新宿区東五軒町3-28 郵便番号162
電話03(5261)4818[営業]
03(5261)4833[編集]
振替・00180-6-117299

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——株式会社若林製本工場

落丁・乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします
定価・発行日はカバーに表示してあります。
©東野圭吾　1994年 Printed in Japan

ISBN4-575-23189-4 C0093

むかし僕が死んだ家

装画　杉本典巳
装幀　中島かほる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

プロローグ

私が幼い日々を過ごしたあの古い家を壊すという知らせは、そのひと月前に、かつて私の父親だった人物から届いていた。もちろん私の母親だった女性と話し合った上で決めたことだろう。彼等はもう何年も前にあの古い家からは出ていて、今は海に近いマンションでのんびりと暮らしていた。余生を送っている、という言い方が一般的かもしれない。

手紙には、取り壊しの日にちだけでなく、それが始まると思われるおおよその時刻までが記してあった。私がその日のその時刻に、あの古い家の前に戻ってくるのを期待してのことだろう。

しかし私は彼等の期待を裏切ることにした。それは決して、彼等と顔を合わせたくないからではなかった。なんといっても彼等は私の両親だった人々なのだ。こちらから彼等を拒むなどということは、到底許されることではない。私はただ、あの古い家から出てくるかもしれない何か、私にも想像のつかない何かを恐れているにすぎないのだ。

取り壊しの当日、私は自分のマンションで音楽を聞いたり、本を読んだりして時間を潰した。外に出なかったのは、誰とも顔を合わせたくなかったからだ。

だが本を読むふりをしながらも、音楽を聞く格好をしながらも、私は頭の中で、あの古い家のことを考えていた。かつて私が受験勉強した部屋のことを、皆で炬燵に入りながらテレビを見た居間のことを、今夜の夕飯はなんだろうとランドセルを背負ったまま覗いた台所のことを。押し入れのこと、

廊下のこと、薄暗い物置のこと。

あの家が壊されて、消滅するさまを思い浮かべた。壁が破られ、床が壊され、柱が折られるのを想像した。柱には、一週間に五分は狂う古い柱時計が取り付けられたままかもしれない。壁には、新聞社名が印刷された何年も前のカレンダーが貼られたままかもしれない。そして縁側の廊下には、直径三センチほどの焦げ跡がついていることだろう。私が小学生の時、レンズを使って焦がしたのだ。あの時は父に、鼓膜が破れるかと思うほど怒鳴られた。

そんな空想を何度も何度も繰り返した。おしまいにはイメージがすりきれてしまい、セピア色に変色した思い出の断片だけが残った。

家といえば、もう一つ忘れられない家がある。

私が育った純和風の家とは違って、異国調の白い小さな家だ。めったに人が来ることのない山の中に、その家はひっそりと立っていた。

その家のことを考えると、私は今も身体が震えてしまう。いいようのない恐ろしさに、胸が苦しくなる。ベッドで一人寝ている時などは、毛布を頭からかぶりたくなる。

しかし一方で、懐かしさに似た気持ちに襲われることもあるのだった。何かが私を呼んでいるような気にさえなる。

だがもちろん私はそこへ足を向けたりはしない。それを思いとどまることが自分自身のためであることは、私が一番よくわかっている。

私はある女性と二人で、その白い家を訪れたのだった。あるものを探すのが目的だった。しかしそ

れが何なのか、私も彼女も知らなかった。そこに何かがあるかもしれないという漠然とした期待だけが、二人をその場所に向かわせたのだ。

それが正しかったのかどうかは今もわからない。

二年前のことだ。

第一章

1

一本の電話が、私の部屋にかかってきた。それがすべてのはじまりだった。

声を聞いた時、すぐに誰なのかわかった。子供っぽさの残る独特の声だ。胸が高鳴った。それでも私は敢えて事務的な口調で、「どちらさまでしょうか」といった。少しばかり意地を見せたつもりだったが、くだらないことをしているなと、直後に後悔した。

「あの、中野ですけど」彼女は旧姓ではなく、今の姓を名乗った。それは彼女なりの意地だったのかもしれない。

「中野さん？」私はまだ気づかないふりをした。

「あ、ごめんなさい。倉橋です。倉橋沙也加です」

「ああ、君か」ようやく思い出したという声を出した。臭い演技だ。「先日はどうも」

すると彼女は返答に窮したように黙りこんだ。無理もなかった。「先日はどうも」という挨拶自体が、全く的外れなものなのだ。

私は軽い笑い声を電話線に乗せた。「とはいっても、この間は殆ど話ができなかったけどね」

「そうね」沙也加も少し肩の力を抜いたようだ。「あなたは、男の友達とばかり話していて、あたしのほうには近づいてこなかったし」
「そういう君も、僕のことは避けてるみたいだったぜ」
「そんなことないわ」
「そうかな」
「そうよ」
「ふうん」私は机の上のシャープペンシルを取り、カチカチカチと芯を出した。気まずい沈黙が数秒。「まあいいや」と私はいった。「それで、今日は一体どういう用件で電話してきたのかな。単なる気紛れかい」
「そんなんじゃないわ」沙也加の呼吸音が伝わってきた。かすかではあるが、呼吸が乱れているのがわかる。決心したように彼女はいった。「会って話したいことがあるんだけれど、時間あるかしら」
私は少し驚いた。彼女から会いたいなどというとは思わなかった。シャープペンシルの芯を見ながら訊いた。「どういう話だい」
一呼吸置いてから、「電話じゃ話しにくいの」と彼女はいった。
受話器を耳に当てたまま、話の内容を想像してみた。三流の恋愛小説のようなストーリーがいくつか頭に浮かんだが、まさか沙也加がそんな用で電話をかけてくるとは思えなかった。それでも私は一応訊いてみた。「その話というのは、僕たち二人に関係しているのかな?」
「あなたには関係ないわ」彼女は言下に否定した。「あたし一人の問題だと思う。でも話を聞いてほ

しいの。その上で、頼みたいことがあるの」さらに私の返答を先回りするように早口で続けた。「あなたにしか頼めないから」

私の胸に好奇心が生まれた。だがそれを抑えつけて質問した。「このことを御主人は了解しているのか？」

「主人は今いないわ」

「いないって？」

「アメリカに行ってるの。仕事で」

「なるほど」人差し指の腹で、シャープペンシルの芯を引っ込めた。

「でも誤解しないで」彼女の息が、また少し乱れた。「彼がいても、どうしようもないことなんだから」

私は黙り込んだ。さっぱり見当がつかなった。ただ事情の深刻さは、彼女の口調から察せられた。それだけに慎重になる必要があった。

「よく考えたほうがいいな」私は唇を舐めた。「ほかにもっと適した人間がいるんじゃないか。今君と僕が会うということは、考えようによっては、とても危険なことだぜ。わかってるのか」

「わかってる。わかった上で頼んでるの」

「だけどさ」

「お願い」絞りだすように彼女はいった。彼女の思い詰めた様子が伝わってくるようだった。遠くを見つめる目。その目の縁は紅潮しているに違いない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私は吐息をついた。「明日の午後なら空いてるけど」少しぶっきらぼうにいってみた。「ありがとう」と彼女は答えた。

高校二年から大学四年までの約六年間、私と沙也加はいわゆる恋人関係にあった。とはいっても情熱的な言葉を交わしたことはないし、格別ドラマチックな思い出があるわけでもない。気がつけば六年も付き合っていたというところだ。

二人の関係にピリオドを打ったのは彼女だった。

「ごめんね。ほかに好きな人ができちゃった」

だから別れましょうとはいわず、彼女は黙って目を伏せたのだった。しかしこれで充分といえば充分だった。お互いを束縛せず、相手に甘えず、関係を終わらせたくなったら率直にいうというのが、我々の間で決めた約束事だったからだ。したがって私は、未練がましく彼女を引き止めるわけにはいかなかった。

「わかった」うつむいた彼女にかけた言葉は、ただこれだけだった。それ以後私たちは、会わなくなった。

再会の時は、それから七年後の初夏に訪れた。高校二年の時の同窓会が新宿で行われたのだ。出席することにした私の胸の中に、沙也加と会えるかもしれないという期待があったことは否定できない。

会場では、それ相当に年を重ねた友人たちと談笑しながら、目の端で彼女の姿を求めた。期待通

り、彼女も来ていた。私と付き合っていた頃は、細すぎるぐらいだった体つきも、女性らしい丸みを帯びたものに変わっていた。化粧も上手くなり、落ち着いた雰囲気をだすことに成功していた。しかし何かの拍子にふと覗く、幼い少女のような危うい雰囲気は、私と付き合っていた頃のままだった。それを認めて私は少し安心した。それこそが沙也加の本質であり、それを失った彼女など想像できなかったからだ。彼女は集団からは一歩退き、自分のテリトリーを確保していた。そして警戒するような目を、さりげなく周囲に配っていた。

その彼女の目が私に向けられたのを感じた。その時こちらも彼女を見たなら、話すきっかけができたかもしれない。だが私は気づかぬふりをしていた。

会が盛り上がった頃、各自が順番に挨拶することになった。沙也加の番が来た時、私は手に持った水割りのグラスに視線を落とした。

四年前に結婚して、現在は専業主婦をしているというのが、沙也加による近況報告だった。夫は商社に勤めていて、あまり家にはいない——よくある話だ。彼女からそういう平凡な話題が出ることなど、昔は想像もしなかったのだが。

「お子さんは？」かつてクラス委員だった女性が訊いた。定番の質問というところだ。私は薄くなった水割りを飲んだ。

「はい。あの……一人います」

「男の子？」

「いえ、女です」

「おいくつ？」
「もうすぐ三歳になります」
「じゃあ、かわいいさかりね」
元クラス委員の言葉に、沙也加は即答しなかった。少し間を置いてから、「ええ、そうね」と、それまでよりやや細い声で答えた。私は顔を上げ、彼女を見た。何かとても苦しげな響きに聞こえたからだった。しかしそのわずかな不自然さに気づいた者は、ほかにはいないようだった。すでに次の者が話を始めていた。
沙也加はハンカチを出し、まるで表情を隠すように額のあたりを押さえていた。その顔色が心なしか青ざめて見えた。なおも私が見つめていると、その視線を察知したかのように彼女はこちらを向いた。この日初めて二人の目と目が合った。
だがそのコンマ何秒後かには、私は顔を伏せていた。
結局この日、私と沙也加が言葉を交わすことはなかった。一体何のために出かけていったんだと、部屋に戻り、ネクタイを緩めながら自分に問いかけた。同時に、もう二度と沙也加に会うことはないだろうと思った。
ところがそれから一週間後に電話がかかってきたのだった。
待ち合わせの場所は、新宿にあるシティホテルの喫茶ラウンジだった。ウェイターに案内されて席についたのが五時十分前だ。沙也加はまだ来ていないようだった。コーヒーを注文し、さほど広くも

ないラウンジを改めて見回してから、心の中で自分自身を嘲笑した。約束の時刻より十分も早く着いて、一体何を期待しているんだ？　ここに現れるのは、女子大生の沙也加じゃない。商社マンの女房になっちまった女なんだぜ。

もう一人の私が反論する。何も期待してなんかいないさ。彼女の深刻そうな声を聞いたから、相談に乗ろうと思っただけさ。俺しか頼る相手がいないっていったじゃないか。

それに対してまた反論。その言葉をおまえはいい気分で反芻しているな。旦那には話せないことでも、俺には話してくれるのかってな。他人の女房にはなっても、まだ俺のことを愛してくれているんじゃないか、そんなふうに期待しているんじゃないのか。やめろ、やめろ。くだらない夢を見ると恥をかくだけだぞ。

そんなことは考えちゃいない。俺はただ――。

五時五分前に沙也加が現れた。

彼女は私を見つけると、一度小さく胸を上下させてから近づいてきた。ペパーミントグリーンのスーツに、白のブラウスという格好だった。スカートの丈は、まだ二十代前半の若さを感じさせる程度に短い。ショートヘアもよく似合っていて、写真に撮れば、そのまま主婦雑誌の表紙になりそうだった。

「あたしのほうが先だと思ったのに」テーブルの横に立って彼女はいった。顔が少し火照って見えた。

「前の用事が早く終わったものだからね。立ってないで、座ったらどうだい」

彼女は頷いて私の向かい側に腰を下ろし、通りかかったウェイターにミルクティーをオーダーした。私がコーヒーで彼女がミルクティー、あの頃と同じだ。

「自宅はこの近くなの？」テーブルの上を見ながらいい、ちらちらとこちらに上目遣いしてきた。

「いや、そうでもない。電車を二本乗り継いできたんだ。といっても、さほどの距離じゃないけどね」

「じゃあどうしてこんな場所をいったの？」ラウンジを見回すように、目だけをくるりと動かした。

「君の家との中間点にしようと思っただけさ。もっとも、少し僕のほうに近いかな。君は今、等々力に住んでるんだったね」

私がいうと、彼女はほんの少し目を見張った。彼女の住まいを私が知っていることが意外だったのだろう。無論先日の同窓会で、彼女が話していたのを覚えていたわけだ。そのことに思い当たったらしく、彼女はわずかに唇を緩めた。

「あたしの話なんか、聞いてないと思ってたのに」

「君は僕の話なんか聞かなかったのか？」

「聞いてた。がんばってるみたいね」

沙也加がそういった時、ミルクティーが運ばれてきた。彼女がそれを一口飲むのを待って、私は尋ねた。「僕の部屋の電話番号は誰から聞いたんだ？」

「工藤君」

「だろうと思った」

同窓会の幹事をしていた男だ。昔から世話好きで、お祭り騒ぎになると活躍する奴だった。工藤も、かつて私と沙也加が付き合っていたことは知っている。だから彼女から私の連絡先を尋ねられ、おそらくいろいろと邪推したことだろう。そうなることを沙也加が予想しないはずはないから、やはり余程の用があると考えるべきだった。

私は財布から自分の名刺を一枚出し、彼女の前に置いた。

「練馬区なのね」名刺を手に取って彼女はいった。

「大学に近いほうがいいからね」大学は豊島区にあった。

「理学部物理学科第七講座……あの頃と同じね」

「研究助手という肩書きがついたのが、唯一の成長さ」ふんと鼻から息を吐いた。

「そのうちに助教授という肩書きに変わるんでしょう？」

「まだ先の話だよ」

沙也加はしばらく私の名刺を見つめていたが、唇を舐めてから顎を上げた。

「このほかに名刺はないの？」

「ほかに？　いいや。どういう意味だい」

「なんていうのかな。文筆業……とでもいうのかしら。そういう仕事もしているって、あの、同窓会の時に誰かが話してたのを聞いたから」

「ああ」私は頷き、少しぬるくなったコーヒーを啜った。「あれはアルバイトだ。副業っていえるほどのものでもない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.